２０２３年6月１１日　Ｎｏ.３６７１

先週の講壇から　　〝新しい心と霊を〟

エゼキエル書 第 18 章 30 節～32 節

聖句「どうしてお前たちは死んでよいだろうか。わたしはだれの死をも喜ばない。お前たちは立ち帰って、生きよ。」(18:31,32)

１.《自殺は罪悪なのか》　毎年、国内で何万もの人たちが自ら命を断っています。理由は様々です。無理心中も多い。何とか生きる道は無かったのかと思いますが、苦しみは当事者にしか分かりません。昔のキリスト教会は自殺を罪悪と考えて禁止しました。自殺者の遺体を火焙りにして川に流したりしました。しかし、逸早く自殺予防のための社会活動を始めたのも教会でした。

２.《孤立が追い詰める》　牧師の中にも重い鬱病を患って苦しんでいる人が大勢います。北海教区では「べてるの家」の活動の御蔭で、精神障碍への理解が進んでいて、カミングアウトし易い環境にあります。また「弱さを元手に」して地域の悩める人たちを繋ぐ教会も存在しています。長年、鬱病と共に生きて来られたＫ牧師は「鬱病患者は孤立すると自殺することがある。孤立させてはいけない」と訴えて居られました。これは全ての人に言えることです。苦しんでいる人を自死にまで追い込むのは孤立感なのです。自死は孤立の結果です。社会生活や家族生活を営んでいても、苦しみを自分独りで抱え込んでしまうと、人は生きられなくなるのです。私たちが為すべきは「繋がっていること」を訴えることだけです。

３.《翻って生きる》　神さまもイスラエルの民に「立ち帰って、生きよ」と語り掛けています。「協会訳」では「翻って生きよ」でした。これは「私はあなたと繋がっている」というメッセージです。繋がっているから、死なれたら辛く悲しい。断ち切られたら痛いのです。一方では「生きたい」と願いながら、病気のために命を断たれる人もいます。割り切れない気持ちになります。でも、命は交換できないのです。主は「新しい心と新しい霊を造り出せ」と言われます。ヘブライ語の「新しい」とは時間の概念ではなく、憐れみと関係する概念なのです。憐れみによって、神の命が私たちの中に吹き込まれ、新しくされるのです。

朝日研一朗牧師